

した。

4) Fallot 四徴 (TOF) 術後症例における Late Potential (LP) の検討 — 長期術後の VT 発生を予測できるか —

佐藤 誠一 (新潟こばり病院) 小児科
福嶋 英樹・佐藤 勇 (新潟大学小児科)
塚 薫
渡辺 弘・宮村 治男 (同 第二外科)

1954年に Lillehei らにより、TOF 根治手術が施行されて以来、診断学の発展と、手術手技・体外循環・心筋保護の飛躍的向上により、外科的治療成績は各施設で安定してきている。一方、長期術後における突然死や不整脈など、新たな問題も提起されるようになり、もはや手術成績そのものではなく、術後生活能力の質的向上をめざす時代となっている。今回は、体表面微小電位を用いて LP を記録して、術後の心室性不整脈との関係を検討した。

症例は5歳から48歳までの計15例(中央値は13歳)で、男性が8例、女性が7例であった。4例に電気生理学的検査(EPS)が施行され、3例にVTが誘発され、1例にLPが検出された。それまでにVTが確認されていた症例は1例のみであった。

体表面微小電位の記録にはフクダ電子社製 VCM-3000を用い、LPの検出には vector magnitude (VM) 法と multiphasic oscillation (MC) 法を用いた。VM法では、右脚ブロック症例の右室電位そのものが遅れを呈し LP と区別できず、さらに左室の LP もマスクされてしまう可能性があり、TOF 術後の LP 検出には不相当と考えられた。MC法では、右室流出路に相当する胸壁に電極を置くことにより、右室流出路切開部局所での LP を検出できる可能性があった。

EPS 症例が少ないため、EPS での LP との比較は困難であったが、症例を重ねて術後の心室性不整脈との関係を検討したい。

第71回新潟臨床放射線学会

日 時 平成3年12月7日(土)

午後2時より

会 場 新潟大学医学部 第2講義室

一 般 演 題

1) 子宮体癌傍腫断端再発の Au-198 グレイン組織内照射による治験例

稲越 英機・斎藤 真理
伊藤 猛・吉村 宣彦
土田恵美子・酒井 邦夫(新潟大学放射線科)

子宮体腺癌で子宮全摘および FAMT 療法10回が行われ、8年後傍腫断端組織に再発した75歳症例に、手術拒否のため Au-198 グレインの組織内照射を行った。

膀胱、直腸および腹膜に近接する直径 2 cm 球形の硬腫瘤に対し直径 3 cm の球形治療容積を想定し、MSKCC 法に準じ 5 mCi の Au グレイン16個を刺入した。一部の線源は基靭帯基部側にやや離れ、また腹膜腔に1個逸脱したので、2カ月後縮小した腫瘤に同強度4個を追加刺入した。

X線撮影および経過 CT 所見から有効線源は13個のみであると仮定すると、MPD:57 Gy, CLPD:69 Gy, RMD:80 Gy と計算されるが、追加刺入は腫瘤縮小後のため実際の腫瘍線量はこの値よりやや多いと推測される。なお、この容積の組織耐容線量は、Rn シードの場合 110 Gy と見積られている。

治療後5年経過するが、再燃は認められず、副障害も全く認められない。本例は組織内照射のよい適応であったと考えられる。

2) ¹⁹²Iridium thin wire による気管支腔内照射の試み

斎藤 真理・樋口 健史(県立がんセンター) 新潟病院放射線科
栗田 雄三・木滑 孝一
横山 晶 (同 内科)

近年、肺癌の集団検診に喀痰細胞診が行われるようになり、胸部X線写真無所見の肺門部の早期肺癌が発見されることが多くなってきた。このような症例は、手術や外照射で対処されてきたが、呼吸機能が悪く手術の適応外とされる症例も多く、また、外照射では手術例に比し、再発例がやや多くみられる傾向があることから、再発例を減らすこと、呼吸機能もできるだけ温存することを目

的に、愛知県がんセンターの不破らの方法を追試する形で ¹⁹²Iridium thin wire を用いた腔内照射を91年9月より試み始めた。胸部X線写真無所見で気管支鏡上所見があり、扁平上皮癌の確診がえられ、低肺機能、重篤疾患の合併などで手術の適応外とされた症例を第一の適応と考え、外照射 40 Gy/20 f および腔内照射 5 Gy/f×5 f を基準線量として照射を試行中である。現在までに10例の登録があり、7例が照射終了、2例が腔内照射施行中1例が外照射を開始したところである。

3) 多分割照射法の初期経験

伊藤 猛・吉村 宣彦
 土田恵美子・稲越 英機 (新潟大学放射線科)
 酒井 邦夫 (長岡赤十字病院放射線科)
 川崎 俊彦 (県立中央病院放射線科)
 塩谷 淳 (新潟大学放射線科)

新潟大学医学部附属病院、およびその関連病院で多分割照射法で治療した45症例47部位について検討した。2例で喉頭癌と食道癌の重複があり、いずれも多分割照射を施行した。部位別では頭頸部が33例と最も多く、STAGE 別ではⅢ期Ⅳ期の進行例の比率が高かった。短期の観察であり一次効果を中心に検討したが、評価可能な例で検討すると、局所制御率ではCRが55%、PRが45%で、NC、PD例はなかった。また頭頸部扁平上皮癌の初回治療根治照射群24例で、原発巣とリンパ節について別個に検討したが、原発巣ではCR 63%、PR 37%、リンパ節ではCR 42%、PR 58%であった。粘膜反応など、急性の放射線障害は通常分割例に比しやや強い印象であったが、副作用のため途中で治療を断念した例はなかった。多くの症例の蓄積と、長期制御率の検討が今後の課題である。

4) 10年以上生存、100歳になった食道癌放射線単独治療の1例

小林 晋一・新妻 伸二
 清水 克英・斎藤 真理 (がんセンター新潟病院放射線科)
 樋口 健史

食道癌は予後不良の癌に属する。89歳時、放射線単独治療を行ない、10年以上生存、100歳になった食道癌症例を経験したので報告する。症例は、89歳、女性。部位はIu~Im、長軸径6cm、

病型はロート型である。ロート型であるが腫瘍成分が多かった。組織型は未分化癌。主訴は嚥下困難。

食道 X-p, 食道ファイバー、生検で診断された。

放射線治療は 6 meV X-ray, 正・両斜30° の3門、照射野 6×10 cm, 3×18=54 Gy (25日)。高齢のため入院期間をなるべく短くするためこのような線量配分とした。その後再発なく生存。1991年11月で10年10ヶ月なる。

5) Brain Stem Glioma の画像所見

—MRI を中心に—

横山 貴子・桑原 悟郎 (新潟大学放射線科)
 西原真美子 (新潟大学歯科)
 岡本浩一郎・登木口 進 (新潟大学歯科放射線科)
 伊藤 寿介

brain stem glioma 4例の MRI 所見を中心に呈示した。症例は4~8才の男児であり、片側の外転神経麻痺、歩行障害で発症した。全例で MRI 上、橋を中心に mass effect を有する病変を認め、中脳から延髄に及んでいた。進展範囲の把握には特に矢状断像が有用であった。4例共、病変部は T1 強調像で低信号、T2 強調像で高信号を示していた。治療開始後の follow up MRI で4例中3例はほぼ等信号域を呈するようになった。1例では初回検査時に、3例では治療開始後に、enhanced portion を認めた。

MRI は CT に比し、病変の存在と進展範囲を明確に把握でき、治療後の経過観察にもより有用であると考えられた。

6) 真菌性上顎洞炎の画像所見

中山 均・益子 典子
 萩原 和夫・足利谷美砂
 佐藤 正治・林 孝文 (新潟大学歯科放射線科)
 佐々木富貴子・中村太保
 伊藤 寿介

真菌性上顎洞(副鼻腔)炎は、免疫能低下などの患者に発症すると考えられてきたが、近年になって特に基礎疾患を有しない患者にも多く発症する。しかし単純写真では決定的な所見がなく、しばしば通常の上顎洞炎と考えられ、治療が奏功しない場合も稀ではない。

我々は、88年から91年までで、検鏡所見で aspergillus による感染と診断された上顎洞炎を5例経験した。この画像所見を、文献的考察を加えて報告する。

症例は29才から64才までで、男性1例で女性4例であった。5例とも片側性の上顎洞に炎症性病変を認め、CT